

なかなか夜が来ない晩夏の日暮れ。「はちす葉のうへ露ひとつ」が「うろろうと……」以下の序詞になっている。蓮の葉の上の露が、町をうろろうするイメージを連想させる、その意外性が持ち味。

娘の婚のすみやかならぬ哀しみよ新郎の家族は福島に在り
片岡なおこ

ディテイルは省略してあるが、物語の大枠は分かる。原発事故が、意外なところに意外な影響を及ぼし、とまどっている心情。

発光器持てる魚のかなしさは水族館の深夜に点る

谷岡亜紀

深海魚のなかには発光器官を持つものがある。「水族館の深夜」は、「偽の深夜」の意味だろう。偽の深夜に、偽の深海で光りつづける深海魚。何やらこう、不本意な生を生きるわれわれ人間の比喩のような気がしてくるのである。

くちづけの定点として左手の痣に上書きしていく記憶
屋良健一郎

相聞歌では目新しい「定点」「上書き」といった語の使われ方に特色がある。「くちづけの定点として」は分りにくいですが、いつでも、視線の方向に左手の痣が見えるの意味だろう。「上書き」はうまく使われていると思う。なお、「いく」は「ゆく」がいいのではないか。

午後八時と指定通りに通販の折りたたみ自転車わが家に届く
加利川友子

予定通りにことが運んだ日常の平凡な一コマが、一首に立ち上げられた面白さ。心待ちにしていたものが予定通りに届いた小さな満足感。日常生活のささいな起伏に取材した一首である。「午後八時と」の「と」は不要か。

日本一暑い熊谷へあつべえの面をかぶりて熱射を避ける
佐久間正城

「あつべえ」は、熊谷市のイメージキャラクター。ネットで見ると、丸顔くるくる目玉のおじさんがまっ赤になって汗を垂らしている図。お面も売り出されたという。その面をかぶっても暑さしのぎにはならないだろうから、下句は冗談だろう。冗談を押し通すユーモア。ただ、上句はやや説明的すぎるか。

蛇とはほとほと長し石組みの奥より総身を時かけて出す
河野千絵

「総身を時かけて出す」という丁寧な描写の面白さ。眺めていた時間の長さと同じである。

身をせめてここに棲みにし人の日々青き実こぼす大
き栗の木
宇都宮とよ

北上全国大会のオプショヨン旅行、高村光太郎山荘の歌。下句、「青き実こぼす」が、作歌時の現場感に、高村光太郎の戦後の心情をかさねて、巧み。